

人という動物と分かりあう



畑正憲

著者略歴

畑 正憲 (はた まさのり)

1935年福岡生まれ。東京大学・理学部生物学科入学、生物系大学院修了。映画制作会社を経て、本格的な著作活動に入る。「われら動物みな兄弟」で第十六回エッセイストクラブ賞を受賞。1971年、北海道浜中町に「動物王国」を建国。動物たちとの心温まる交流を描き続け、1977年には第二十五回菊池寛賞を受賞する。著書は『畑正憲作品集』『ムツゴロウの青春記』『ムツゴロウの動物交際術』など多数。

ソフトバンク新書 001

ひと どうぶつ わ
人という動物と分かりあう

2006年3月25日 初版第1刷発行

著 者：^{はた まさのり}**畑 正憲**

発行者：新田光敏

発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13

編 集：03(5549)1236 営 業：03(5549)1201

装 幀：松 昭教

印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社第2書籍編集部まで必ず書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

©Hata Masanori 2006 Printed in Japan

ISBN4-7973-3339-1

人という動物と分かりあう

畑正憲

ソフトバンク新書

001

目次

人という動物と分かりあう

心は脳にある	7
天井の高さと知能	12
アニマル・セラピーの現実	15
E君との経験	18
動物とのふれあいの中で	23
胎教という誤解	26
胎児が感じていること	30
ワラビーの「ラビ」——胎児は哲学を必要としない	34
脳は宇宙で最も精緻な創造物である	39
馬の出産日を知るために	44
三つの攻撃行動	48

成長していく子馬	51
学習は世界を目にして始まる	57
失った指の感覚	63
動物の心のあり方を知りたい	69
フクロウの視覚と聴覚	74
子供は眠るごとに賢くなる	80
眠りへの誘導	90
情報を情報として捉える	95
母の乳を探して	100
一対一適応期	111
エゾシカの出産	117
タヌキの子が育たなかった理由	122
ストレスがもたらすもの	124
吊い合戦	129

母オオカミの通行スタンプ 135

新しい命を育むことの大変さ 142

母と子の絆 147

噛まれた瞬間に見た風景 155

人と馬が築いた関係 160

善意のネグレクション 165

天敵反応からの発見 167

性ホルモンと動物の行動 171

負の情報を与える刺激 178

叱りが子供を強くする 183

人という動物と分かりあう

#心は脳にある

心の闇、という言葉が、一時期、マスコミで盛んに使われた。たとえば、ある少年が残忍で卑劣な凶悪犯罪を犯したとする。と、ニュースショウの画面に担任の先生が登場し、“おとなしくて、目立たない普通の子供ですよ”と発言する。顔にぼかしをかけられた同級生が、異口同音、“あまり面白くないけど、喧嘩けんかすることもないし”などと語る。

さあ、分からなくなる。どうして、そのように大それた事件を起こしたのか。ここでお出ましになるのが、心の闇、である。そしてそれは、翌日には、少年Aの心の闇に迫る、というタイトルのもとで、なんとかして納得できる形にしようとして、普通ではない言動の切れ端や日記の断片を並べ、特集を組み立てる。

心の闇などと聞くと、分かった気にさせられる人が多いので、多用されたのだと思う。しかし、一体全体、心の闇とは何だろう。心は、闇のように暗いのか。それとも、心の奥底には、誰もうかがい知れぬ深く暗い部分があつて、普段は闇に閉ざされているのか。そして、その闇には悪魔が潜^{ひそ}んでいて、秘密の扉が開くと、少年をかりたて、幼児の首を切り落とさせるのだろうか。

そもそも心とは何だろう。日に照らされた白い部分と、夜に包まれた黒い部分があるのだろうか。

得体が知れない、よく分からない、そういうものを理解しようとする時、最も安易で便利な方法は、ある部分を黒く塗りつぶし、まがまがしい、どろどろしたものが潜むところだと認識してしまうことである。

同類の典型的な例が、悪魔がついているだの、成仏できない先祖の霊が心の中には、
るなどと言いたてる茶番である。今もってそれが堂々と公共放送で流されているのは、
日本の七不思議のひとつと言つていいくらいだ。大昔の宗教の中には、心の中にはい
ろいろなものが棲^すんでいて、時に応じて表に出てくると説くものがあつたが、それと

何ら遜色そんしよくがない荒唐無稽かうとうむけいさがまかり通っている。

余談になるが、心が謎のかたまりだった時代、その怪奇さ不思議さを見事に絵にしたのが、ヒエロニムス・ボスである。極楽地獄の思想と練り合わされ、その画面には、超モダンな世界が展開されている。私は夢中になってベルギーやオランダをさ迷ったし、マドリードの美術館で代表作の前に立った時には、足が震えた。

そのヒエロニムスを、美術散歩という番組で取り上げてくれたので、いそいそとテレビの前に座ったのだが、一つ目小僧や傘お化けを描く怪奇漫画家が解説者として登場し、怪奇画としてだけ光を当てていたのには、心底がっかりさせられてしまった。暗い時代の心象として見てもらいたかった。

絵と言え、人間の深層心理を分析するという学者が持ち出す、例のパターンがある。

深夜、筆が停とまると、私は居間でテレビをつける。画面には、若い女性がずらりと並んでいる。するとそこへ、れっきとした心理学者が出現し、いろいろな絵を見せて、女性たちを選ばせる。そして、選んだ各々について、やれ潔癖症だ、男好きだ、犯さ

れたい願望があるなどと分析していくのである。

とにかく、いかがわしい。そんなことで、人の心が分かってたまるものかと思う。血液型で性格が診断できるという説が流行したことがあるが、嘘もこれだけ大らかであっけらかんとしていれば、笑う気にもなれず、ゲーム性の高さをむしろ評価したいくらいだ。しかし、一枚の絵を選んだだけで、犯されたい願望があるなどと診断されては、科学の衣を着ているだけに、このインチキ野郎めと批判したくなる。精神の学問に、フロイドは大きな足跡を残したが、また、流した害毒も相当なものだ。精神行動の奥底に性を見過ぎていたし、それを覗きこもうとする技術^{のぞ}を特殊化させ過ぎた。

私たちの心は、脳にある。それは、間違いない事実だ。

もし科学的な知識がこの世にまったくないとしたら、両の手をあなたにかざし、汝の心ここにありと、左の胸のあたりを指すかもしれない。事実、南米の初期文明では、心は心臓に宿るとされ、生きた人間から心臓をえぐり出して神に捧げた。古代ギリシヤ文明では、心は肝臓にあると信じられた。

私たちはしかし、生物学や医学を発達させ、心は脳の中にあることを突きとめ、そ

の活動をさまざまな技術を駆使し、心の謎の解明に挑戦してきた。

ところが、その過程の中で出てきたひとつのものを使い、とんでもないことを思いつく者が出てくる。典型的な例が、あのオウム真理教だ。警察による手入れが行われた時、信者たちは、頭にヘンテコなバンドをしていた。そのバンドは、麻原なにがしの脳波を記録し、それを信者の脳に送りこむ装置だという。

狂信者の思いこみが、なんともすご過ぎて、私は笑うに笑えなかった。

脳波は、脳の活動の結果として、表面に出てくる。いわば、ゴミだ。

ゴミだって、分析のしよつては、立派な科学の材料になり、資料を蓄積して検討を加えれば、そのゴミが出てきた家族の暮らしぶりぐらゐは推し測れる。

だがオウムのものは、ゴミを頭に巻いていれぱ、その信者が生きていけると考えるぐらゐの、途方もない代物しろものなのである。

狂信の果てのカリカチュアなのだが、なぜか私は素直に笑えなかつた。科学の知識が普及するにつれ、同じようなことが、あちこちで堂々で行われているからである。

たとえば、科学機器の発達により、右脳と左脳の活動の違いが分かつてきた。そこ

までは、よろしい。科学の勝利のひとつだ。ところが、これを聞きかじったプロ野球の監督が、春のキャンプで、グラウンドに音楽をたれ流し、右脳と左脳を同時に鍛えるのだと言い、それを実践していたのには驚いた。オウム真理教のヘッドバンド級の愚行なのだが、これはしかし、まったく役に立たないわけでもあるまい。

日本のプロ野球は、すさまじい騒音の中で行われている。応援団とやらが存在し、笛や太鼓ではやしたてる。その騒音のストレスに耐えさせる訓練にはなるのではないか。

#天井の高さと知能

一時期、胎教というのが大流行した。妊娠中に、胎児が外界に反応しているという、ちよつとした事実から、胎教という大学問が発生したのである。一歳からでは遅過ぎるなどというタイトルのもとで、いかに多くの本が出版されたことか。

ひとかけらの知識。小さな真実。それがどんなに小さかろうと、システム全体と正しく関連づけて理解されると、人類に大きな恩恵をもたらしてくれたりする。しかし、

空想と結びついてしまうと、極彩色のニセ御殿になってしまうのだ。

胎教の大流行時代、四十年ほど前のことだが、私は、ある科学ジャーナリストの家庭に招待された。彼は、科学を分かりやすく解説する仕事をしていて、大変な音楽好きだった。

趣味が本業になった感じで、音楽の雑誌などにも寄稿していた。

マンションは近代的で、高価であることはひと目で分かった。天井が高くて、居間が異様に広く、彼の仕事場は、仕切りなしで隅にしつらえられていた。どうやら、ワシルームタイプという代物らしかった。

彼は、ハーブティーを飲みながら言った。

「統計によるとね、天井が高い家で育った子には、頭が良い子が多いんだよ。それにさ、親と子の断絶は、それぞれが部屋を持つことから始まると思うんだ。長い間、人類は同じ空間で睦み合^{むつ}って暮らしてきた。ぼくはここで、子供に、働くおやじの姿をすべて見せたいと思う」

どこの国の統計だか知らないが、高い天井を作り得るのは大きな家だし、たとえば

アメリカの豪邸では、天井の高さは八メートル以上ある。そして、富裕な階級は、教育にたくさん金をかけられる。

三年前、私は南アフリカを旅行し、すさまじい光景にぶつかった。拾った板切れを打ちつけただけの家が、折り重なるようにして、ずっと地平線まで続いているのである。三十年ほど前には、これほどではなかった。貧しい人たちの層が増大し、エイズ蔓延まんえんの巣窟そうくつにもなっている。ここでは、高い天井など望むべくもなく、天井に頭をぶつけないように用心しながら雨露をしのいでいる。

もつと言うなら、高天井高知能説の彼が見逃していることがある。豪邸には広い庭がつきものだ。裏の森にシカが住んでいるかもしれないし、そのような家は先祖代々受け継がれていて、祖父や祖母が子供時代に遊んだ玩具が残されていたりする。春には花があふれるし、夏には、池のほとりでヘビがカエルを狙っている。少なくとも、コンクリートの箱に閉じこめられる核家族ではない。

大きな犬がいるだろう。馬小屋には、馬だっているはずだ。

高い天井、高知能というデータが、まるで薬みたいに使われていて、それさえ毎日

服用していれば、知能が高い子に育つという錯覚さっかくをもたらししている。どうやら現代人は、環境さえも薬にしたがっているようだ。この伝でいくと、風にそよぐ花がいやしになるからと言って、その映像を壁に映写する時代がくるかもしれない。

#アニマル・セラピーの現実

同様の思考で広がったのが、アニマル・セラピーなどである。

老人ホームに犬などを連れていくと、老人に笑顔が増えるし、脈拍や血圧の状態が改善されるという。そこで、アニマル・セラピストが誕生し、それ用に訓練されたおとなしい犬を、一定時間、老人ホームへと連れていくボランティアが出現した。

このような活動それ自体は、立派で、大変貴いものだと私は思っている。ただし、老人だけを社会から切り離して住まわせることに問題はないだろうか。

私たちの脳は、そしてこれこそが本書の主な論点なのだが、環境と相互作用しながら存在している。部品を詰めこんだ機械ではないのである。これを読んでいるあなたの脳には、私が書いていることに影響され、いくつかシナプスをこしらえているはず